

## 大学におけるメディアリテラシー教育

メディアリテラシー教育開発研究会⑥

関西大学教授 久保田 賢一

### 1 はじめに

私は、大学で2年生以上を対象としたメディアリテラシーを育成する「AVメディア制作論」という講義を担当している。メディアリテラシーに関する教育が小学校、中学校で盛んになってきたといっても、受講するほとんどの大学生は、メディアリテラシーについて、これまで学んだこともなければ、メディアリテラシーという言葉さえも知らないのが現状である。

この科目はメディアについて学ぶための導入科目として、制作する立場にたってメディアリテラシーを学ぶカリキュラムになっている。授業が進むにしたがい、受講する学生はこれまでのメディアに対する常識を覆され、次第にメディアに対して制作する側の視点を持つようになり、メディアとの接し方に変化が見られるようになる。実際に大学の講義の中でメディアリテラシーがどのように教えられているか、私の実践事例をもとに紹介していきたい。

### 2 「AVメディア制作論」の授業概要

学生は、まずどの科目を受講するかシラバスを見て決める。シラバスとは、科目の概要を説明し

たものであり、冊子でも見ることもできるし、ウェブで調べることもできる。「AVメディア制作論」の概要は以下のようにになっている。

「本講義では、CATVやテレビ放送、映画における映像作品やコンピュータによるインタラクティブなマルチメディア作品など、さまざまなメディア制作の考え方や手法について総合的に学ぶ。企画のたて方から始まり、構成・台本の作り方、取材の方法、撮影手法、ポストプロダクション、メディア表現法など、メディア制作にかかわる基礎的な知識の習得および批判的に映像を視聴する力を培う」

学生はこのシラバスを見て受講を決めるが、必ずしもこの内容に関心の高い学生だけが受講するわけではない。

授業は表に示すように13回で構成されている。200人程度が履修する大教室での授業は受け身になりがちであるが、この授業では学生から意見を求めるためにワイヤレスマイクを渡し、発言してもらう。メディア制作を学ぶには、まず情報発信をする力が求められるからだ。はじめはとまどいを見せる学生も、次第に大勢の前で発言することになってくる。

授業ではビデオやインターネットを活用し、さまざまな映像や資料を提示し、多様な視点からメディアを分析することを心がけている。バラエテ

表・2006年春学期「AVメディア制作論」の講義テーマ

1	なぜメディア制作をするのか（導入とメディアの定義）
2	「あいのり」から学ぶメディア制作技法（メディアリテラシーの重要性）
3	報道する側の心構え（戦場におけるカメラマン、送る側の心構え）
4	広告の制作と分析（ベネトンの広告はなぜあのように作られているのか）
5	アニメーションの作り方（メディアクリエイターによる講演）
6	メディア制作のプロセス（プレプロダクション、プロダクション、ポストプロダクション）
7	企画作り（広報ビデオの企画を立てる）
8	調査報道における制作技法（ドキュメンタリー・・・ディレクターの講演）
9	構成を練る（企画から構成へ）
10	台本の制作（黒澤明に見る台本制作の技法）
11	カメラワークとビデオ編集の技法
12	映画の編集技法と絵コンテ制作
13	他大学におけるメディア制作の実践（コンテスト入賞作品の紹介）

ィ番組、ニュース報道、広告をはじめ、さまざまな素材を鑑賞し、議論し、分析を深めていく。さらに、学生は授業の感想や意見を毎授業後ウェブページに投稿するのが課題になっている。ウェブ掲示板を利用するので、教員だけでなく学生同士で閲覧でき、相互に意見交換ができる仕組みになっている。

### 3 バラエティ番組「あいのり」を視聴する

ほとんどの学生はテレビやインターネットから送られてくる情報をそのまま、意識することなく受けとめている。そこで授業で最初にするのは、学生に「メディアに対する無自覚性」を自覚してもらうことだ。

最初の授業では、1999年に始まった長寿番組である「あいのり」を素材として使う。フジテレビ系列で放送され、高視聴率を得ているバラエティ番組で、7人の男女がラブワゴンと呼ばれる車に乗って、世界各地を旅する中で意中の異性に告白するという内容である。

学生に事後インタビューしてみると、「興味があるというか、食いつくような内容だから楽しかった」「こういう身近なものを取り上げられて、

考える機会になった」と答えていた。「あいのり」という学生にとって身近な番組を素材として使うことで、興味、関心が高まったことがわかる。

この番組の嗜好は、大好きでよく見るという学生と好きではないという学生にはっきり二分される。よく見る学生にとっては、素人が出演する番組であり、恋愛をしている登場人物に自分自身を投影しやすいのだろう。最初の掲示板への投稿は次のようなものが多かった。

#### 〈掲示板への投稿〉

タイトル：鳥肌！！！！

全く他人の恋愛を毎回、はらはらどきどきしてこの時間が待ち遠しくさせる「あいのり」。改めて考え直すと、この30分には一度はグッとさせられるものがあり、すごく濃いものになっている！この番組ができるまで、どれほどのカメラにテープを使い編集していくのか、大変興味を持つ。私もこんな番組を作ってみたい。

授業では番組を10分ほど3度視聴する。1度目は、オーディエンスとしてどこに感動したか、意識的に視聴する。2度目は、制作者の側に立ち、カメラの配置、マイクの設定、ライティング、編集技法などを考えながら視聴する。最後に、私の解釈をシーンごとに区切って説明していく。授業

のあと学生は次のようなコメントを掲示板に書き込んでくる。

〈掲示板への投稿〉

タイトル：第2回目の授業感想

今回の授業は実際にあいのりを見てカメラ位置・音響効果などについて討論したわけですが、やはりメディア効果は奥が深いものだ。興味もあるしもっとメディア効果について知りたいけど、これから先自宅でテレビを見てたらつい分析してもうて、素直にその番組を見れなくなったりして。

「あいのり」が好きで視聴していた学生にとっては、このような分析はショックであり、がっかりさせられるが、メディアの作られ方を知ることの重要性を学び、「いままで素直に感情移入していたけれど、どういう意図で作られているか考えるようになった」と述べている。

送り手の視点に立つことを促す要因として、「実際に目の前でちょっとずつちょっとずつ一瞬一瞬見せられたから実感がわいた」「1コマ1コマ止めて説明してくれたし、1コマをちゃんと見たことなかったし、今までは全部流れていただけだから」と学生はコメントしている。「カット」ごとに分解したことにより、「編集されている」ことや「カメラマンがいる」ことに現実感を伴って気づくことができたといえる。

その結果、「今までは自分は視聴者として見ていた」「今まではただ面白いというだけで見ていた」と、今までの自分が「受け手」であったことに気づき、自己を相対化し、振り返ることで、「ここはどういう意図を持たせているのかと考えて見るようになった」と自分のテレビの見方が変化していることを自覚するようになった。

## 4 ニュース報道をテーマに

ニュース報道を素材に取り上げるときは、新しく話題になっているテーマが関心を集める。ニュースは、少しでも古くなると、もうそれは取り上げて面白くなくなってしまう。しかし、授業の流れにぴったりと合ったものを探すのは難しい。

2005年春学期に取り上げたニュース報道は、中国の反日デモであった。中国人が日本大使館に投石をしたことに対して、掲示板に学生の怒りの投稿があった。ちょうど、そのころ私は北京の国際会議に参加する予定があったので、授業で扱うのには興味深いトピックだと思い、取り上げることにした。

〈掲示板への投稿〉

タイトル：反日デモについて

まずはじめに僕は大使館に石やら何やらを投げ込まれている報道を見て頭にきた。大使館は日本の領土だから、大使館を襲撃するってことは日本本土にミサイルを撃ち込むのと大差ないと思う。それに対しての中国政府の「責任は日本にある」というコメントはさすがに腹が立った。(後略)

掲示板への投稿は、メディアの枠組みからの分析ではなく、ニュース映像を見て、そこから流される情報をそのまま受け入れ、中国での反日意識の強さに反発していた。授業ではニュース映像を3度視聴し、その映像の中に含まれる意図、それを支援するために使われた編集技法、音楽、ナレーションに関して、メディアリテラシーの視点から分析を加えた。さらに、デモが行われていた頃、私自身が北京で見えてきた平静な光景を伝えた。学生は、はじめニュース報道は真実を報道していると疑いもなく視聴していたが、多様な視点からの分析を理解すると、次第に自分の考えが揺さぶられてくる。そして、中国のイメージがメディアからきていることに改めて気づかされ、相対化して情報を捉えることの大切さを理解する。

〈掲示板への投稿〉

タイトル：メディアが信用できません

私は授業を受けて、メディアが持っている怖さを日に日に感じると同時に、メディアに対して怒りを覚えることも多くなってきました。今回の中国の件でもそうですが、なぜ中国のことをあれだけ批判するような内容に作っているのに、日本のコトはサッと流すように終わってしまうのですか？(中略) そのメディアに踊らされている自分は本当に怖いと思いました。

中国の報道について議論しているなか、福知山線の脱線事故の報道に話題が移り、身近な場所での事故だけに、学生の関心はさらに高まった。複数の局による報道の内容の違い、被害者に対する取材のあり方など、いろいろな視点からの議論が掲示板で交わされた。授業ではこの事件についてのニュースを視聴していないにもかかわらず掲示板での議論が盛り上がり、学生にとってテレビと自己との関係を再構築するきっかけとなった。

## 5 送る側の責任と役割

写真からいろいろな意味を読み取る活動をフォトランゲージと呼ぶ。動画は時系列に沿って新しい情報が展開されるが、写真は一枚の静止画の中にさまざまな情報が織り込まれている。じっくり写真を見て、そこに埋め込まれている情報を読み解く作業にはいろいろな発見がある。戦場カメラマン、ロバート・キャパの「崩れ落ちる兵士」とピューリッツ賞を受賞したケビン・カーターの「ハゲワシと少女」の写真を提示し、その中から読み取れるものを自由に考えさせた。「なぜ、危険な戦場に赴き写真を撮影するのか」「目の前に死にそんな少女がいたときに、写真を撮り続けていられるか」「なぜ少女を救わなかったのか」といった質問を学生に投げかける。これまで考えもしなかった質問に、学生はとまどい、メディアを制作し、発表することの責任と役割を考えるようになる。

次に取り上げる素材は、阪神大震災の時の取材映像である。子どもの頃に阪神大震災を実際に体験した学生は多い。取材記者に対して「撮っている暇があるのならば、手伝え」と火事や倒壊マンションの現場で被災者から浴びせられた言葉にどのように応えるか、ジレンマを抱えた報道記者はどう行動すべきか、議論する。

送る側の責任について、報道だけでなく広告についても検討する。オリビエ・トスカニーは90年代にベネトンの広告を担当した写真家だ。彼の手によるベネトンの広告は、湾岸戦争、宗教問題、エイズ、内戦などをテーマにしたショッキングな

映像である。社会問題を扱ったこの広告は、商品の宣伝をするものが広告であると当然のように思っていた学生に揺さぶりをかける。どういうメッセージをメディアに載せるべきか、オーディエンスはメディアからのメッセージをどう解釈するのか、送り手と受け手の両方の立場から広告について議論をする。

化粧品や清涼飲料水のCMには、どのようなメッセージが込められているか、そこに埋め込まれている価値観は何か、オーディエンスがその商品を購入するきっかけは何か、CM分析はメディアを相対化する方法である。学生はこのようなCM分析を通して、メディアが自分たちにどのような影響を及ぼしているか学ぶ。

## 6 メディアリテラシー教育の カリキュラム・デザイン

「あいのり」の視聴から始まる私の授業は、ニュース報道、広告の分析につながり、メディア制作全体のプロセスを学ぶ内容に発展していく。映像に関して議論するだけでなく、準備段階のプロセスである「企画」づくり、「構成」をグループで考える。また、プロとして活躍している人を授業に呼び、講演をしてもらうこともある。2006年春学期には、人形をコマ取りして制作するアニメーション作家と「アスベスト」をテーマにドキュメンタリー制作をしたディレクターに講演をお願いした。

手探りで始めたこの授業であるが、「オープンエンドの授業形態」、「適切な素材」、「掲示板による双方向コミュニケーション」の3つが、カリキュラムを構成する重要な要素であると思うようになった。

### (1) オープンエンドの授業形態

ある意味、授業における教員はメディアであると見なすことができる。教員は学生に情報を整理し、わかりやすく伝達する役割を担う。学生は教員から送られたメッセージを無批判に受け取り、それを暗記して試験に臨む。つまり学生にとって教員は権威のあるメディアであり、そこから送ら

れてくるメッセージは、「正しい答」であり、覚え込むべきものである。私の授業では、その前提に揺さぶりをかける。教員の言っていることは本当に正しいのであろうか、別の見方はないのか、問いかける。私の授業では、オープンエンドなディスカッションを奨励する。多様な意見を尊重し、それぞれの意見を自分自身で分析し、自分の答を模索することを大切にしてほしいと思うからだ。

これまで教員の言ったことを「正しい答」としてそのまま受け止めていた学生にとって、自分自身が考えなければならないということに最初はとまどいを見せる。「何が答なのですか」「先生の意見は何ですか」と問いかけてくる。「いったい正しい答はどこにあるのか」一人ひとりの学生が答を求めて模索することの重要性を理解してほしいと学生に説明する。

## (2) 適切な素材

映像素材は学生を強く引きつける。まず、素材を提示し、そこからいろいろな見方を引き出し、議論を深める。学生を引きつけるには、3つの要素が必要だ。第一に「素材への親近感」である。素材が学生にとって身近であり、親近感の持てるもの、また学生の経験と結びついたものであると学習意欲が違ってくる。「あいのり」は学生にとって身近であり、「阪神大震災」は実際に体験に基づいた意見交換ができ、議論を促した。

第二に「いま、ここ」で起きている「リアルタイム性」のある素材がよい。ニュース報道の素材として授業に取り入れた「中国の反日デモ」や「福知山線列車脱線事故」は、学生の議論を活性化した。

第三に、いろいろな立場に立って議論できる素材がよい。「ロールプレイ」をしやすい素材は思考を深めてくれる。別な立場に立つことで葛藤に陥り、それに伴う気づきと振り返りを誘発する。「震災」の報道において、情報を送る側である報道記者の立場で考える場合と、取材される側である被災者の立場で考える場合の2つの視点で捉えてみる。一方の立場で考えるだけでなく、多様な視点で捉えることの重要性を意識するようになった。

## (3) 掲示板による双方向コミュニケーション

ウェブ上の掲示板は、ふりかえりのツールであ

る。授業が終わったあと、学生は授業の感想や意見をアップする。そこに学生同士の自由な意見交換が行われ、授業中に十分に議論されなかったことが深められていく。もちろん、学生に自由に発言を促すだけでなく、教員が介入し、意見交換を活性化させたり、深い理解を促すような質問をしたりすることは欠かせない。

## 7 学生からの授業評価

学生からの授業評価アンケートは学期の終わりに実施されている。学生から次のような感想ももらった。

「予想していたよりも講義が大変興味深く面白いです。考えさせられることがあり、テレビや広告の見方が少し変わったと思います」  
「今まで深く考えずに見ていた番組や写真などを分析したり、他の人の意見を聞くことで、今までとは違う見方ができるようになったと思います」  
「メディアについての考え方がこの授業を受けてから、まったく見方が変わりました」  
「この授業を受けて、テレビ番組に対する見方が変わったのでよかったです。授業中に学生の意見を聞いたり、掲示板への書き込みを行ったりして、学生の授業への参加を勧めているというのもよかったです」

授業は「気づき－振り返り－概念の変容」というサイクルで展開する。映像素材は、そのサイクルの最初の働きかけをする。次に、素材をテーマにオープンエンドな議論をする。議論に参加することで、学生は既成概念に疑問を持ち、揺さぶりをかけられる。そして、掲示板による学生同士の議論がメディアをさらに相対化させていく。このサイクルを繰り返すことで、メディアに対する新しい態度が育成されていく。

メディアリテラシーは、現代社会において誰もが身につけなければならない力である。多くの大学の基礎科目として、メディアリテラシー教育をもっと導入する必要がある。